手軽で効果の高い開発基盤の作り方

≪ローリスクで大きな効果：地域で・みんなで・誰でも≫

PRODEFI モデル紹介資料

セネガル総合村落林業開発計画プロジェクト

（PRODEFI）

2004 年８月

はじめに

　セネガル総合村落林業開発プロジェクト（PRODEFI)では、2002 年にプロジェクトの方針を変更して以降、住民による自主的な天然資源の持続的な管理に効果のある開発援助の方法の開発に力を入れてきました。その結果、ファシリテーションなどの特別なスキルを必要とせず、援助団体のサイズや目的にかかわらず利用できる、コストパフォーマンスが高い方法論をまとめることができました。

　この方法論は PRODEFI の短い活動のみで得られたものではなく、過去の多くの開発援助の経験を参考に PRODEFI が仮説をたて、その実証として効果の確認を行ったものです。
研修を主体としたステージから入っていく方法論ですが、非常にコストパフォーマンスも高く、多くの開発援助の案件に、計画の大小を問わず導入できるものです。また他のコンポーネントと組み合わせて利用することも可能な柔軟な方法論です。

　ただし本当に重要なのは「どのように実施するか」という形ではなく、「なぜこのように行うか」というエッセンスです。それは例えば地域住民に十分なオプションや判断材料を提供すること、地域のリソースへのアクセスを容易にすること、住民間のコミュニケーションを活性化すること、そして住民の参加意識を高めること、などです。

　PRODEFI の開発モデルはいわばベーシック・モデルです。そのまま利用してもほとんどのケースで何らかの効果をもたらすことができると思います。ただし、どれくらい効果を高めることができるかは状況に合わせた工夫次第です。皆さんは皆さんそれぞれの状況に応じて工夫を加え、独自の応用を試みてください。

セネガル総合村落林業計画
チーフアドバイザー　野田直人

PRODEFI モデル紹介資料　目次

はじめに

１．PRODEFI モデルの概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

２．PRODEFI モデルの潜在的ユーザー　・・・・・・・・・・・・・・・・・　２

３．　PRODEFI モデルの研修の特徴と効果　・・・・・・・・・・・・・・・　３

3-1　PRODEFI 研修の特徴　4
3-2　PRODEFI 研修の効果　7
3-3　選別型研修との比較　14

４．PRODEFI モデルの実施ステップ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　17

4-0　PRODEFI モデルの適用の前に　17
4-1　第１ステップ：PRODEFI 研修実施　19
4-2　第２ステップ：研修効果の持続と補強のための措置　24
4-3　PRODEFI モデルの有効性　27

５．PRODEFI モデルの実践の流れ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　29

5-0　プロジェクト対象住民への説明　29
5-1　ニーズ分析　29
5-2　研修計画策定　30
5-3　研修準備　31
5-4　研修実施　32
5-5　新たに生じたニーズの把握と次期投入の決定　34

６．PRODEFI モデルの活用にあたって　・・・・・・・・・・・・・・・・・　35

6-1　人口規模　35
6-2　住民の機会費用　35
6-3　組織化の難易度　36
6-4　他の支援団体の存在　36

添付資料

１． PRODEFI モデルの概要

PRODEFI モデルとは何でしょうか？

手軽で効果の高い開発基盤の作り方

ローリスクで大きな効果:地域で･みんなで･誰でも

PRODEFI モデルとは、住民が持っている活力を引き出し、その活力を、個人や組織の活動の活性化つなげ、住民を「自分たちによる自分たちのための」地域の開発プロセスへと導入する手順を示すものです。ここでいう「地域」とは、１つの村であっても、村の一部であってもよく、村の集まりである郡や県など大小の行政区分であってもかまいません。PRODEFI では、活動単位を村とし、研修を始めとする活動を村レベルで繰り広げてきました。

PRODEFI モデルの全体像は、「研修という形で住民へのインプットを開始し、住民の反応を見て、次の支援活動を検討する」という非常に単純なものです。従来型のアプローチとの決定的な違いは、従来型モデルでは、それが参加型と呼ばれるものであっても、開発の全体計画を活動の開始当初に決めしまうものであるのに対し、ここに述べる PRODEFI モデルでは、最初の活動こそ研修と特定していますが、この研修は、「呼び水」であり、研修に対する対象住民の反応を見てから、その後の活動を検討することを原則とします。つまり、次の活動を決めるためには、「住民の反応」が必要であり、この「活動－反応」の繰り返しが、開発を進める推進力となるのです。

PRODEFI モデルの「呼び水」である「研修」も、これまでに多くのプロジェクトが行ってきたものとは、一味違います。それは、どのような研修なのでしょうか？

PRODEFI モデルでは、**「地域で」**、**「地域の講師を活用し」**、**「地域のニーズにあった」**研修を、**「参加者を選別せず」**、**「多数を対象に」**実施する

PRODEFI モデルの研修を実施することにより、研修実施者は**ローリスクで大きな効果**をあげることが可能です。また、研修参加者である住民の中にも、研修後、様々なプラスの変化が生まれることが確認されています。

本資料では、まず、PRODEFI モデルの研修の特徴と効果を、続いて、異なるタイプのプロジェクトで同研修が活用された際に生じる効果を取り上げ、次にモデルの実施ステップを説明し、最後に PRODEFI におけるモデルの実践例と活用の際の留意点をまとめます。

２．PRODEFI モデルの潜在的ユーザー

誰が PRODEFI モデルを活用するのでしょうか？

住民主体の自然資源管理活動や農村開発を目指す、個人や組織、プロジェクトのすべてが、PRODEFI モデルの潜在的なユーザーである

もし、あなたが、「住民と共に考え行動する」プロジェクトの実施を考えているのであれば、あるいは、現在、実施しているのであれば、この資料を読み、PRODEFI モデルの活用を検討してはいかがでしょうか。活動やプロジェクトのタイプ、セクター、規模は問いません。森林分野や水産分野のプロジェクトであっても、貧困削減、総合地域開発を目指すプロジェクトであっても、PRODEFI モデルの適用は可能です。この資料では、モデルの適用単位として「村」を想定していますが、前述のとおり、村の住民の一部をターゲットにすることも可能ですし、複数の村が集まった地区、さらには、セネガルの場合では、村落共同体（CR ：communauté rurale）や県など、もっと大きな範囲を対象とすることも可能です。また「PRODEFI 研修」というローリスク、つまり、低コストの研修を活動の中心に据えているため、資金規模の小さな住民組織や NGO でも適用可能ですし、ドナーや政府機関などの大型組織が活用しても、これまでのアプローチと比して、ローリスクで大きな効果が得られます。

フィルギ地区 メディナ・ンダウエン村での研修風景

３．PRODEFI モデルの研修の特徴と効果

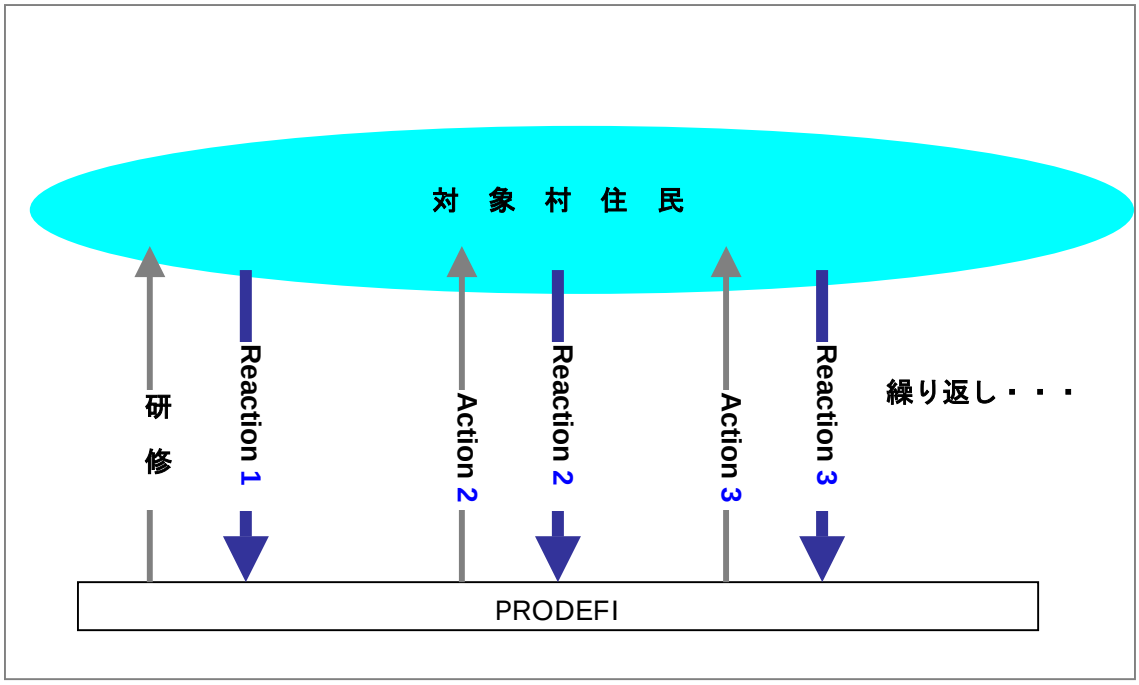
PRODEFI モデルの主要活動は、「PRODEFI 研修」と呼ばれる研修活動です。この章では、PRODEFI 研修を中心にモデルの特徴と効果を述べたいと思います。

PRODEFI モデルの特徴とはどのようなものでしょうか？

- まず、研修という形で、対象地域へのインプットを開始する
- 地域のニーズに応えた研修を地域の資源を活用して、参加者を選別せずに多数を対象として村で実施する
- インプットに対するリアクションを見て、次のインプットを検討する

PRODEFI モデルの始まりは、研修です。PRODEFI では、研修を、「住民ー講師間、住民間の情報・知識・技術のやり取りの場」と考え、対象村へのインプットを、プロジェクトー対象住民の相互作用で作り上げる研修という形で開始します。PRODEFI モデルの研修を、これ以後、「PRODEFI 研修」と呼びましょう。

図 3-1 PRODEFI モデルの概念図　その１



３－１ PRODEFI 研修の特徴

PRODEFI 研修には以下のような特徴があります。

1. 住民のニーズ･要望に応える「あなたの村の研修」
2. 地元の講師、地域にある教材を活用する「地域密着型研修」
3. 村でその村の住民を対象に実施する「気軽な研修」
4. 誰でも参加可能な「私にも参加できる研修」
5. 村の多くの住民が参加する「みんなの研修」

3-1-1 「地域のニーズに応える」⇒住民のニーズ・要望に応える「あなたの村の研修」

PRODEFI 研修では、村を基点として、まず、研修に結び付けられる村のニーズを把握し、それを研修テーマに転換します。井戸や堰堤などの小規模インフラ建設の要請も、施設そのものの投入を第一に考えるのではなく、「井戸掘りの研修・実習」、「小堰堤や石積み作りの研修・実習」という形で、住民に提供することを原則とします。

3-1-2「地域の資源を用いる」⇒　地元の講師、地域の教材を活用する「地域密着型研修」

PRODEFI 研修では、研修講師を始めとするリソースパーソンは、地域のネットワークを活用し、まず、活動実施村の近隣の住民の中から探し出します。地元に住む研修講師は、地元の状況をよく知っていますので、より地域のニーズに即した研修実施につながります。

教材も「村にあるもの」を最大限活用し、研修後に、住民が研修で得た技術や知識を活用・実践するために必要な最低限の外部資源（道具や原材料など）を研修教材として導入します。人や物など地域の資源を活用することで、研修コストが削減できます。住民にとっても、研修終了後、「研修中に習ったこと」をスムーズに実践に移すことが可能となります。また、研修講師が近隣に住んでいるため、研修後のフォローアップも簡単ですし、住民－研修講師間のネットワークの構築の可能性も生まれます。

3-1-3「現地で実施する」⇒　村でその村の住民を対象に実施する「気軽な研修」

基本的に、村レベルでその村の住民を対象に研修を実施します。「村での研修」は、実施者にとっては、「研修場所の借り上げが不要」、「参加者の交通費や滞在費などが不要」になるため、研修コストの低減につながり、住民にとっては、村や家を不在にする時間が短くなるために、研修に参加しやすくなります。PRODEFI モデルの「村での研修」は、実施者にとっても参加者にとても「気軽な研修」となります。

Box 1　地域の講師採用だからできた、不測の事態への対応

地域の研修講師を雇用したおかげで、不測の事態に対して柔軟な対応ができ、研修実施者にとっても研修受講者にとってもダメージが最小で済んだ例である。

フィムラ地区のジロール村では、研修が数回にわたって延期された。PRODEFI の研修開催が予定されていた日に、他の援助機関が日当（1500Fcfa/日）を出して地域住民を作業に動員したため、村の女性グループリーダーが、隣村に住む研修講師に研修延期を依頼した。しかし、一日だけの予定で始まった作業は終わらず、あと一日、あと一日と三度も延期され、準備に尽力していた講師陣（計4人）は落胆し、開催を懸念し始めた。しかし、PRODEFI はこの依頼を逆に女性グループの研修ニーズと受講意欲の表れと歓迎し、講師陣にスケジュールを調整し、開催を延期するよう依頼した。なぜなら、参加費も食事も出ない研修の延期を依頼するのは、住民が研修内容そのものに興味があると判断したためである。講師は、結局、女性グループリーダーや援助機関と数回の打合せで日程を調整した上で実施にこぎつけ、研修は盛況に終わった。

このような不測の事態の際も、地域の人材を活用し村で開催したからこそ、柔軟な対応が可能となり、ダメージを最小に抑えることができる。これが従来のように大都市の研修センターに受講者を招待して行う研修であったなら、対応がつかなかったであろう。通信事情の悪いジロール村の受講希望者が事前に講師に連絡を取れる可能性も低い。また、外来講師を雇用していれば、講師を研修実施地に3日も足止めした上に研修を中止し、あらためて研修実施を依頼しなくてはならず、余計なコストが発生する。そして、ダカール在住のプロジェクトメンバーや外来講師が、日程調整のためにジロール村の女性グループや援助機関と数回の打合せを持つことも困難である。さらに、連絡がつかない場合、女性グループは受講意欲がないとみなされる危険がある。

これらのマイナスの影響を小さく抑えられたのも地域開催であればこそといえよう。

3-1-4「参加者を選別しない」⇒　誰でも参加可能な「私にも参加できる研修」

PRODEF 研修では、研修参加者を「選びません」。その研修に参加したい人で、参加可能な人は、誰でも参加できます。通常、研修を実施する際には、「ＸＸ村では、00 研修の参加者△人を選ぶ」、「▲▲研修には各グループのリーダーが参加する」など、研修実施者が、研修の実施形態やテーマにより参加者を選別、あるいは、村に選別を依頼するケースが多く見られます。これでは、研修テーマへの関心度や研修への参加意欲に関係なく、「リーダーである者」、「研修に関する情報を入手できる者」に研修参加の機会が集中することも考えられ、結果として、同じ人物が繰り返し、異なる研修に参加するような事態も起こりうるわけです。そして、研修後の習得技術・情報の活用や実践、普及は、選別された少数の参加者次第ということになります。

参加者を選ばない PRODEFI 研修には、テーマに関心のある人はもちろん、「ちょっとおもしろそう」という興味本位の住民でも参加できます。これまで、研修は「選ばれた人のもの」と思っていた大多数の住民にとり、PRODEFI 研修は「私にも参加できる」研修なのです。

BOX 2 選択型研修についてのメディナ･ンダウェン村住民の見解

村から数人を選び行われる研修では、出席した人が、村に戻り研修で学んだ内容を伝えるために、人を集めることも、話を聞いてもらうことも困難である。そして、数人しか選ばれないことによって、村内に混乱が生まれる。また、研修を受ける人が数人だけでは村全体の開発へは発展していかない。

3-1-5「多数を対象とする」⇒ 村の多くの住民が参加する「みんなの研修」

「参加したい人は、誰でも参加できる」の原則に則り、希望者があるかぎり、PRODEFI 研修では、同じ村で、同じテーマの研修を繰り返し行います。このため、１つの村で、同じテーマの研修参加者の人数が多くなり、技術の実践度や普及度が高くなることも容易に想像がつきます。PRODEFI の研修を通じて、住民個人の情報量や技術的選択肢が広がるばかりか、皆が参加できる研修であることから、集団での情報量や技術・活動面での選択肢も拡大し、その結果、個人、集団での活動の活性化につながります。

PRODEFI 研修は、「私にも参加できる研修」

３－２　PRODEFI 研修の効果

PRODEFI 研修を実施すれば、どのような効果が得られるのでしょうか？

3-1-1～5 の特徴を備えた研修を実施することにより、従来型の研修*に比して、**ローリスクで大きな効果**をあげることができる

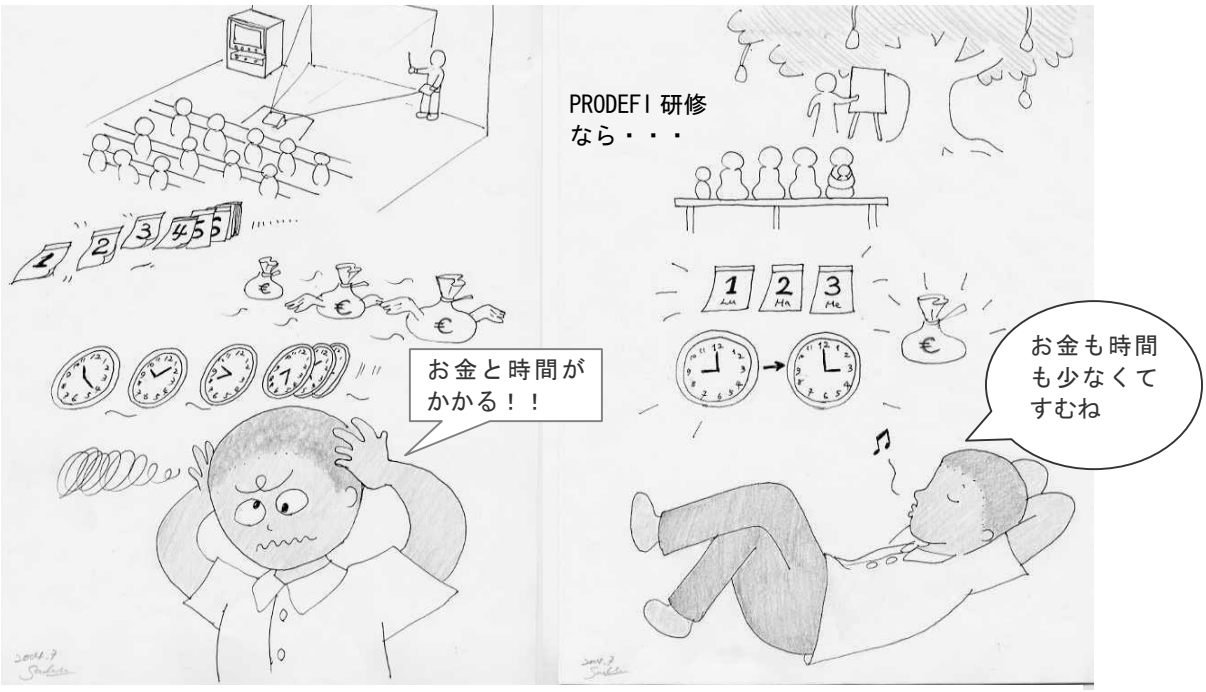
*従来型研修：セネガルで広く行われているタイプの研修で、プロジェクト対象地域の全村、あるいは、数村の選別した住民を、中心村や近隣のコミューン、研修施設に集め行う（詳細は 3-3 参照）

3-2-1 ローリスク⇒「低インプット」で研修実施にかかる「時間が短い」

「地域の資源を活用する」、「現地で実施する」PRODEFI 研修では、従来型の研修と比較して、研修１回にかかる費用、参加者あたりの研修費用が、非常に低く抑えられます（3-3 参照）。このため、同額の資金で賄える研修の回数、参加者数が多くなり、研修で習得した技術・情報を活用する参加者の数も増えます。

また、実施者、参加者間の情報の交換・取りまとめ（「どの村から何人、誰が出るのか」など参加者選択と参加者への報告に関わる作業）や研修場所の手配等に係る仕事量が減り、短い準備期間で１回の研修を実施することができます。

通常、プロジェクトには時間・資金の面での制約があり、PRODEFI 研修ですと、予想通りの効果が得られない研修があったとしても、金額的損失が少なく、繰り返しやり直す時間的余裕もあるため、**研修実施者にとり、リスクは低いものとなります。**



大きな研修（左）と小さな研修（右）

3-2-2 大きな効果⇒「研修実施者の立場」と「住民の視点」から効果が確認された

研修により期待される具体的な効果とは何でしょうか？　研修は技術や情報を提供・交換する場と考えられますので、研修後、その情報や技術が参加者である住民に活用されるかどうか、また、研修に参加していない住民にもその技術が伝っているかどうかが、まず、その効果を計る上で、重要な指標となってきます。これらの効果は、実践者数を数えるなどし、定量的に測定できるものですが、直接、数量では表すことのできない効果もあります。PRODEFI 研修の実施後には、実践率や普及率など数値に置き換えられる効果に加え、住民の考え方や行動の変化等に関わる効果も多く報告されています。

以下に、PRODEFI 研修の効果を、参加者である「住民の目から見たもの」と、実施者である「プロジェクトの立場から見たもの」に整理しまとめます。ここに挙げた効果は、いずれも、すでに対象地域で、観察されたものであり、決して、机上の空論を述べているわけではありません。

<u>住民の視点からの効果</u>

１）　**「私も研修に参加できてうれしい」**

PRODEFI 研修には誰もが参加できるため、これまで研修には縁がなかった人々も多く参加しています。それらの人々にとり、研修に参加することは、「本当にうれしい」ことであり、参加者としての意識や意欲も高揚します。多くの住民の「うれしい」という気持ちは、何か新しいことを始めるきっかけとなり、個人で、村全体で、様々な活動を生み出す活力になると考えられます。実際に、PRODEFI 研修の対象村では、新しい何かを始めた住民や住民組織があり、この資料の中にも具体例をいくつか紹介しています。

「私も研修に参加できてうれしい！」

「私も研修に参加できてうれしい」

２）　「住民間での情報交換が活発になった」

PRODEFI で行っている村での研修そのものが、住民にとっての情報交換の場となりますが、住民間では、研修後も研修テーマや研修そのものに関する情報のやりとりが活発に行われています。例えば、居住区の違いなどの理由で、余り行き来のなかった異なる民族の女性達が、「PRODEFI 研修」という共有の場・体験をもつことで、互いのコミュニケーション密度を高め、協働や連帯の精神を強める結果になりました。活性化したコミュニケーションが、さらに、他の活動を生み出す母体となっているというわけです。

３）　「私達にも決められる」

2）の活性化されたコミュニケーションの下地に加え、PRODEFI 研修により、村の住民が1箇所に集まることが多くなります。その場では、グループのこと、村のことも自然に話されるようになり、何らかの意思決定につながる場合もあります。多くの住民が集まる村の苗畑や女性達の社交場である共同の野菜畑が、PRODEFI 研修で習った技術を実践する場であると同時に、住民の協議の場になっています。

BOX 3 皆で話し合うこと

PRODEFI 対象村のバウー村では、広場（Place publique）が村民達の協議の場であり、以前は、村長や長老など限られた住民以外は、その協議に参加することはなかった。PRORDEFI の村民苗畑に多くの住民が作業をしに集まるようになると、苗畑自体が、苗畑の管理や共同の野菜栽培など村全体に関わる活動を協議する場となっていった。苗畑には誰もがアクセス可能であり、「みんなが参加できる協議の場」が、村に新たに誕生したことになる。

住民が自分たちで何かを決め実行した例として、クール･ワール村の住民たちが、「野菜栽培を行うのに貯水槽があればいい」と考え、みなで話し合い、自分たちが中心になって貯水槽を建設したことが挙げられる。

「みんなで楽しく実践」　村の野菜畑が
女性達の社交の場、意見交換の場となっている

「私達で、貯水槽を作ろう！」

４）　「個人、グループ問わず実践できる」

PRODEFI 研修には誰でも参加できるので、研修ののち、同じ研修を受けた参加者が集まりグループで実践に移すことも可能ですし、個人で実践することも可能です。つまり活動の種類やその制約条件、各自の好みで、集団で実践することも、個人で実践することもできるのです。逆に、既存のグループのメンバー全員が、同じ研修を受講することも可能であり、皆で同じ知識・技術を共有、実践することでグループ活動の活性化にもつながります。

５）　「研修で習ったことが、簡単に確認できる」

PRODEFI 研修には多くの住民が参加できるので、一人の参加者の身近に他の参加者がいることになり、研修後、住民間で習ったことの相互確認が簡単にできます。また、研修欠席者が、出席者に研修内容を聞くことも容易です（回りに多くの参加者がいますので）。加えて、講師は地元の人ですので、研修後、講師による住民の実践の確認に要する時間やコストも少なくすむことは言うまでもありません。

６）　「住民間に良い刺激が生まれた」

PRODEFI 研修対象村では、同じ研修への参加者数が多いため、村のあちらこちらで、苗畑作りなら苗畑作り、野菜栽培なら野菜栽培と同じ活動に取り組む住民が出てきます。自分と同じ活動を隣人が行っているのであれば、「となりはどんな具合だろう？」と自身の活動と比べたくなるのが人間です。そこに、いい意味での競争意識が芽生え、PRODEFI 研修の実践の成果を競い合うことになり、個人やグループ間によい刺激が生まれます。

BOX　4　皆で実践すること

PRODEFI対象地区のフィムラ3村では、ビーズ細工や染色、野菜加工の研修の後に、参加者達が定期的に集まり技術を実践している。研修から１ヶ月半の間に行われた共同作業の回数は、ジロール村でビーズ１回、染色３回、加工１回、フィムラ村では染色３回、加工３回、ヤエン村でビーズ5回、染色 4 回となっている。参加者も、研修期間中の技術の習得度合いに個人差があったとしても、共同作業を通じて、互いに教えあい、補完しあうことができると、共同作業の有用性を感じている。また、個人でも作業が可能なビーズ細工では、女性達が、流行や各自の好みを取り入れたアイデアを出し合い、研修では習わなかった細工の作品を作り上げ、互いに品評しあい、競い合う光景も見られる。

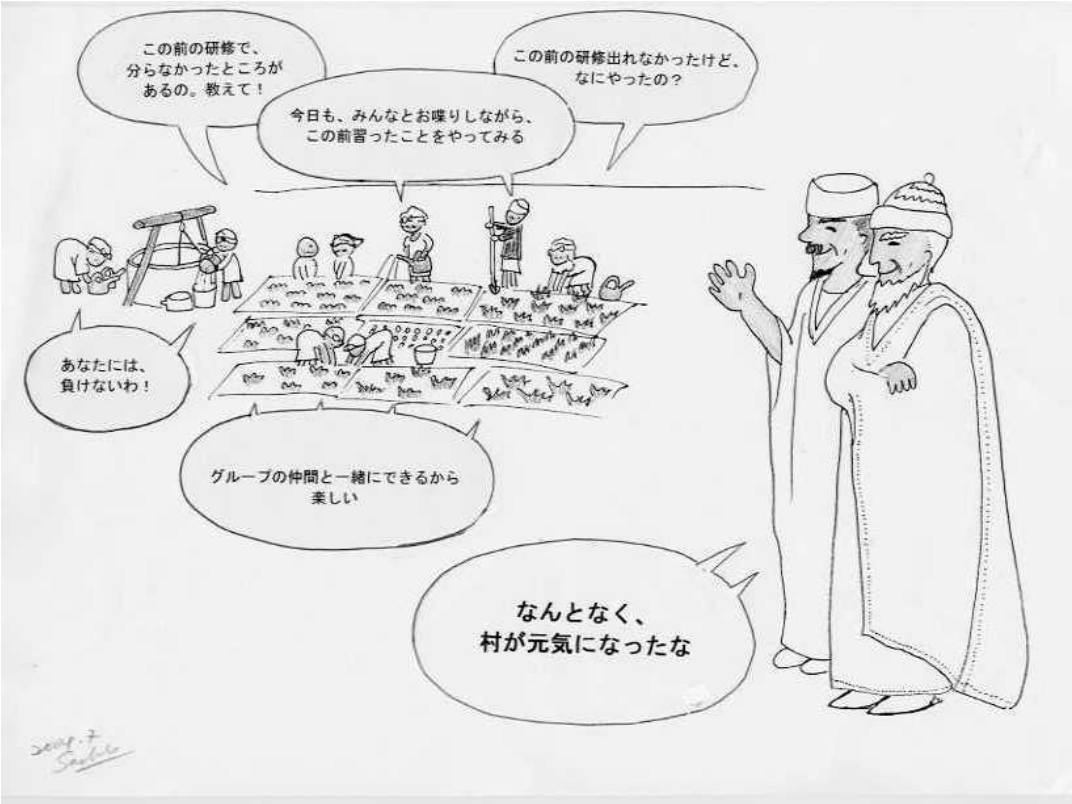
いずれの村でも、共同作業が行われるのは、広場や公共施設といった、公共の場であるので、他の住民の興味を引きやすい。その結果、毎回、その場に研修に参加しなかった住民が加わっており、参加者から他の住民への技術の伝達が活発に行われている。また、同じ家に住む女性のうち１名が研修に参加し、帰宅後、他の女性に研修技術を伝達するという家族間での技術の伝達も行われている。

「私達、ビーズ作りに夢中です」

「野菜加工」研修での１コマ

７）　「村全体が元気なる」

住民の多くが同じ知識や技術を共有し、住民間のコミュニケーションが活発になることで、住民の集まりである村自体が活性化してきます。PRODEFI 対象地区では、「PRODEFI が始まり、何が変わったか」という問いに対し、多くの住民が、「住民間の連帯感が強まった」と答えています。さらには、住民自身の口から、「眠っていた村人を PRODEFI が起こしてくれた。自分たちの社会を見つめなおし、活動しようとしているところだ」、「PRODEFI が、病気だったことにも気づかなかった私達を、病気に気づかせてくれて、治してくれ、私たちは、今、健康で歩けるようになった」などの頼もしい意見も聞かれるようになりました。



「村全体が元気になる！」PRODEFI 研修

実施者の視点から見た効果

１）　**研修後の実施率が高い**

研修実施者にとっては、研修で習得した技術を住民が活用するかどうかが、まず、気になるところです。PROFEFI 研修参加者のうち、研修終了後に研修で習得した技術を実践する者の割合は非常に高いことが確認されました。研修参加者を対象としたサンプル調査[1]では、研修終了後、「個人で実践」する場合は、18%（染色）～85%（植林）であり、実践率はテーマにより大きく異なりますが、「集団で実践」の場合は、全テーマで実践率が 90%を超えています（添付資料　表１参照）。この高い実践率は、PRODEFI 研修が、住民のニーズを踏まえていること、村で実践可能な活動を提案していることに加え、「住民の視点からの効果」にありますように、「研修に参加できてうれしい」気持ちから生まれる意欲や「みんなで実践でき、教えあったり、刺激しあったりできる」環境を生み出していることに起因するものと考えられます。

2）　**研修後の普及度が高い**

続いて、研修実施者が注目するのは、研修時に参加者に提示した技術や情報が、参加していない他の住民へも伝わっているかどうかではないでしょうか。PRODEFI 研修では、他の住民への伝達の度合いも高いことが確認されています。上記調査の回答者のうち８割弱の人が、「研修に参加しなかった人に、何らかの形で研修の内容を伝えた」とし、約 2 割の人が「その研修には参加しなかったが、実践を試みている」と答えています[2]（添付資料 グラフ１参照）。つまり、多くの研修参加者が口頭や実践を通じて他者に研修内容を伝えようとし、研修に参加していない住民の中からも実践者が出てきているということです。普及度の高さも、「住民の視点から見た効果」から説明でき（BOX 4 のフィムラ地区の例など）、研修への参加者が多く、実践者が多ければ、（他の住民への）普及速度も人数も大きいことがわかります。

Box 5　おじいちゃんのカーニ

マンビ地区のクール･ワール村での普及の事例である。家の近くでトウガラシを栽培し、収入を得ている野菜栽培研修に参加した若者の様子を見たことがきっかけで、初めての乾期の野菜栽培に取り組んでいる男性がいる。クール･ワール村のトゥルカ族で 80 歳くらいのスレイマン･ディオップ氏は、家の裏でカーニ 45 本の栽培を 2003 年 11 月から始めた。彼は野菜栽培の研修には出席していない。彼は、すでにかなり高齢なので、家畜と子どもたちが入ってこないように監督するだけで、実際の農作業は、野菜研修に参加した彼の息子が担当している。

---

[1] 2004 年４～5 月に PRODEFI 松谷短期専門家により、２つの対象地区（マンビ、フィルギ）の 7 村で、PRODEFI 研修参加者の中から 30 サンプル／村を選び（計 210 サンプル）、行われた質問紙調査の結果。

[2] 研修に参加しなかった住民のうち、参加者をコピーし個人で実践した者のみで、集団で実践した者は数えていない。

Box 6 家族で実践･事業所で実践

いくら受講者を選別しない、地域で開催すると言っても、希望者のだれもが都合よく、研修に参加できるわけではない。しかし、身近な誰かが研修に参加すれば、周囲の住民にもその技術を学ぶチャンスが生まれる。

研修に参加したデニ･マリク･ゲイ地区のデニ･ユスフー村では、苗木生産研修に参加した父が、研修後、自分の息子のうち 13 歳と 14 歳の二人に、研修で学んだ技術を伝達し、自分の農地の一角をこの二人に責任を持たせて任せている。

また、デニ･ババカール･ジョップ村では、野菜栽培研修と養鶏研修に参加した農家兼養鶏家が、自分の使用人たちに研修で学んだ技術を伝達した。使用人たちの野菜栽培技術は向上し、この農家の収穫が増えた。また、以前は高かった鶏の死亡率が、研修技術を適用後低減した。

フィムラ地区のフィムラ村では、家事の担い手である家族の母と娘が、二人とも研修への参加を希望していた。この母娘は相談して役割を分担し、母が研修に参加し娘が家事を担当した。母は帰宅後忘れないうちに娘に研修で学んだことを伝えると張り切っていた。

3) 周辺への普及の下準備ができる

さて、対象村・地域で技術や知識がある程度普及したと判断されると、次に、研修実施者としては、周辺地域への同じ技術・情報の普及を考えます。PRODEFI 対象地域の周辺村では、すでに、PRODEFI 研修への要望が高まっており、住民はその実施を待ち望んでいる状態です。

従来、農村部では、親戚付き合いや冠婚葬祭などで近隣村との行き来が盛んであるため、PRODEFI の村にも近隣村住民が頻繁に訪れます。他村の住民は、PRODEFI 村の住民の口から PRODEFI のことを聞きますし（８割近くの研修参加者が他の人に研修について話しているという事実)、これまでなかった共同の野菜畑や石積みに興味をひかれます。また、その村で作られた野菜や石鹸を買う機会もあるでしょう。このように、周辺村住民は、PRODEFI の村で新しい活動が始まり、石積みが土壌浸食を食い止める、栽培した野菜を女性達が売っているなど「目に見える効果」を目の当たりにすることになります。そして、そのきっかけが PRODEFI 研修であることを知り、「自分たちにも研修を」と望むようになるのです。

PRODEFI 研修で行った「苗木生産」や「野菜栽培」に関しては、近隣村の住民が、対象村に来て、「自分にも教えて欲しい」と研修参加者に頼み、その場で、住民どうしのミニ講習会が開かれるという事例も報告されています。逆に、対象村の住民に「自分たちの村に講師としてきて欲しい」との依頼もあるようです。これらの実例より、周辺村の研修に対する期待の大きさが伺えると同時に、住民間での技術普及の下地も出来上がっていることがわかります。

BOX 7 周辺地域の PRODEFI 研修に対する期待の高まり

ニョロ地区にある PRODEFI 対象村クール･ワール村の男性は隣村の男性グループに対して 3 日間の野菜苗床の作り方を伝授するために実演講習を行っており、メディナ･ンダウェン村の女性グループも隣村の女性グループから「野菜栽培の実習を見学したい」との申し出を受けている。また、PRODEFI 対象地区の近隣村であるブドゥック村では、村長が、ある住民に石積み工法の技術を習得してくることを命じ、バウー村住民がその村を訪れ、同技術の指導にあたる予定である。

フィムラ地区では、PRODEFI 研修の成果品であるビーズ細工、染物、野菜加工品を、自分たちの村で売るばかりでなく、研修参加者が近隣村に行く際に持参し、販売に努めている。売り手が、「これらの製品は、PRODEFI 研修で習って、自分たちが作った」と言うために、周辺住民の PRODEFI 研修に対する興味を高める結果となっている。

３－３　選別型研修との比較

ここでは、PRODEFI 研修と、一般に広く実施されている研修との簡単な比較をしてみましょう。まず、皆さんがこれまでに参加したことのある、あるいは、実施したことのある住民対象の技術研修を思い浮かべて、以下の表に書き込んでください。

表３－１　私の参加した／実施した研修

	参加／実施した研修
研修場所	
研修講師 （どこから招聘したか？）	
参加者 （何村から？どのように参加者を選んだか？）	
１村ごとの参加者数	
必要経費 （項目を記述する）	
研修後の効果 （技術は実践されているか？他の住民への普及は？）	

これまで一般に行われてきた研修の最大の特徴は、**「参加者を選別する」**ということです。このタイプの研修は、往々にして、プロジェクトの対象地域や対象数か村から、テーマ毎に選別した参加者を、中心村や近隣のコミューン（施設）に集め実施されます。このタイプの研修をここでは、「選別型研修」と呼ぶことにしましょう。

BOX 8 同じテーマの研修の費用と効果の比較

選別型研修

3日間の植林･苗生産研修を、プロジェクト対象村9村の住民代表20人を近隣の中心村に集め実施した。講師として近くに住む農村普及センター（CERP）森林官を雇用した。総支出は、参加者の交通費や滞在費を含め総計27万CFAであった。研修終了後、国家的行事である「植林の日」の村をあげての植林や、プロジェクトで作った共同苗畑以外には、個人やグループでの植林や苗生産は見られなかった。

PRODEFI研修

3日間の苗畑研修を12の対象村で実施した。講師をCERP森林官に依頼し、平均参加者は40名／村で、1村あたりかかった研修費用は9.3万CFAであった。12村中7村で実施した参加者に研修後の実践をたずねる調査（訳注1参照）の結果、半数以上の者が、苗生産を個人で実施しており、集団では、ほぼ全員が実践していることがわかった。

- 2つの研修の参加者一人当たりの研修費用はいくらですか？　どうして、そのような差がでるのですか？
- 2つの研修の効果を比べてください？　どうしてそのよう違いがあるのでしょうか？

BOX ８の選別型研修の場合、1村あたりの平均参加者数が２～３人となり、少数の参加者にインプットを集中させています（参加者一人当たりの研修費用は13,500 CFA）。この少数の参加者が村に戻り、研修で取得した技術や知識を実践する、あるいは、他の住民に伝えることは、実施者がそれを一方的に期待しているだけで、確約はされていません。「選別された」参加者が、常に、研修テーマの技術・知識の習得を必要とし、それを実践に移すとは限らないからです。彼らが実践すると仮定した場合でも、２～３人／村の割合では、他の住民への普及には限りがあるでしょう。

同じ研修テーマのPRODEFI研修の場合は、1村あたりの参加者数が40名で、1人あたりの研修費用は2,325 CFAと非常に低く抑えられます。そして、３－２の「住民の視点から見た効果」で述べたような住民の意欲を掻き立てる仕組みに加え、研修中に行う実習の場（例えば苗生産や植林）が、自分たちの村の中にあるので、研修終了後も、同じ場所で、参加者がスムーズに実践を継続し、研修に参加しなかった住民も、その場に来れば、技術を習得することができるのです。

図３－２からもわかるように、村で実施され誰でも参加できるPRODEFI研修は、選別型研修と比して、村内の「参加者密度」が大きく、「参加者間」、「参加者－参加しなかった住民間」の相互作用も多くなります。この活性化された住民間の相互作用が、技術の実践や普及の推進力になるばかりではなく、グループや村の活動を活発にする要因となっているのです。

図３－２　選別型研修と PRODEFI 研修における住民間の相互作用の比較

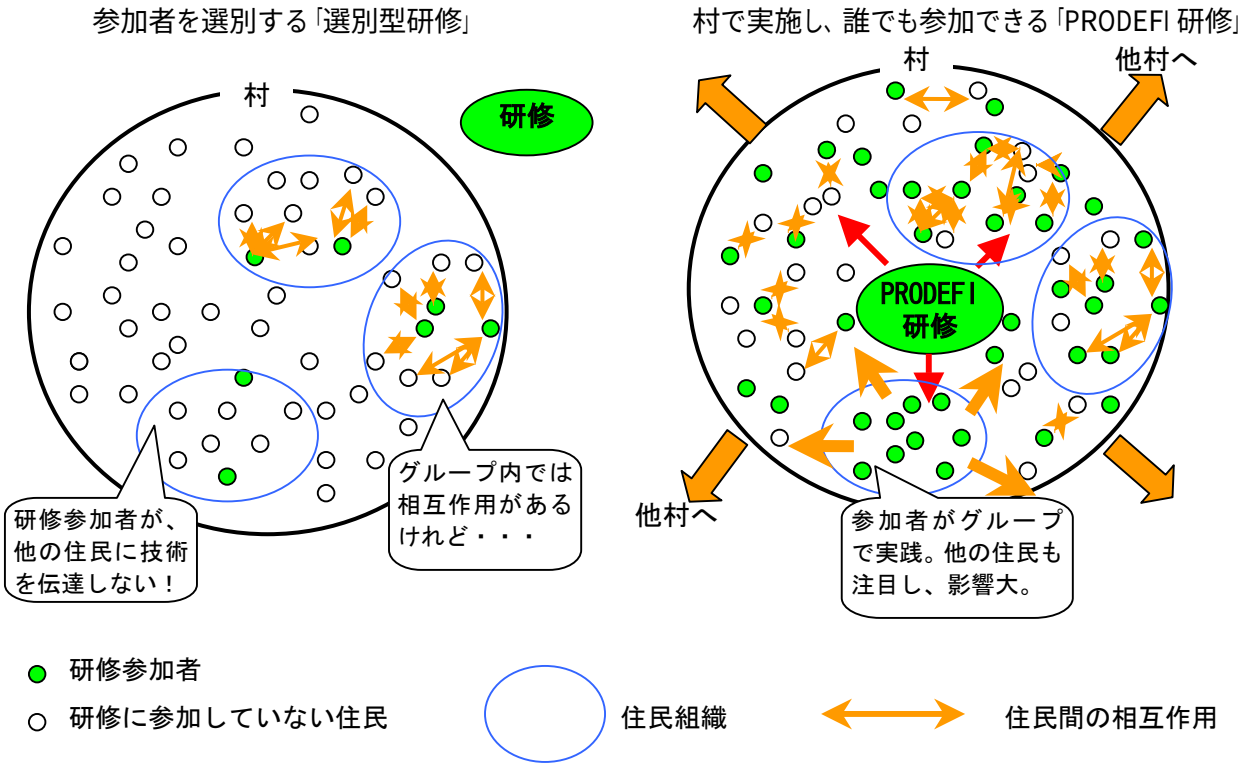


表３－２　選別型研修と PRODEFI 研修の比較のまとめ

研修	選別型	PRODEFI
研修場所	中心村 近隣コミューンにある研修施設	対象各村
研修講師	対象地域からの場合もあるが、ダカール等の都市から招聘する場合が多い	対象地域内に在住する講師を優先的に雇用
研修参加者	研修実施者側の選定基準に沿って、対象地域内の複数村で選別された参加者	各対象村でその研修に参加したい人（周辺村住民が参加する場合もあり）
１村あたりの参加者数	２～５人／村	約37名／研修＊
必要経費 （教材以外）	講師に支払う謝礼や日当・宿泊・交通費（遠方よりの招聘なので高い場合が多い）／参加者に支払う宿泊・食事・交通費／研修施設の賃料・・・	講師への謝礼と交通費
研修後の効果	実践は少数の参加者に限られる場合が多く、参加者以外への普及も少ない	これまでに見てきたように、実践率も普及度も高い

＊　2004 年４月までに PRODEFI が実施した研修のテーマ／村ごとの研修参加者数の平均

４．PRODEFI モデルの実施ステップ

PRODEFI モデルの全体像は、「①研修という形で住民へのインプットを開始し、住民の反応を見て、②次の対応を決定し実施する」という単純なものです。ここでは、①の部分を PRODEFI モデルの第１ステップ（つまり、PRODEFI 研修）、②の部分を PRODEFI モデルの第２ステップとし、各ステップの活動の選択肢を提示します。PRODEFI モデルの第１ステップについては、すでに、PRODEFI のこれまでの活動を通じ、経験が蓄積され、効果が実証されていますが、弟２ステップは、まだ、実施されていませんので、①の住民の反応から考えられる可能な活動の選択肢を提示するにとどめます。

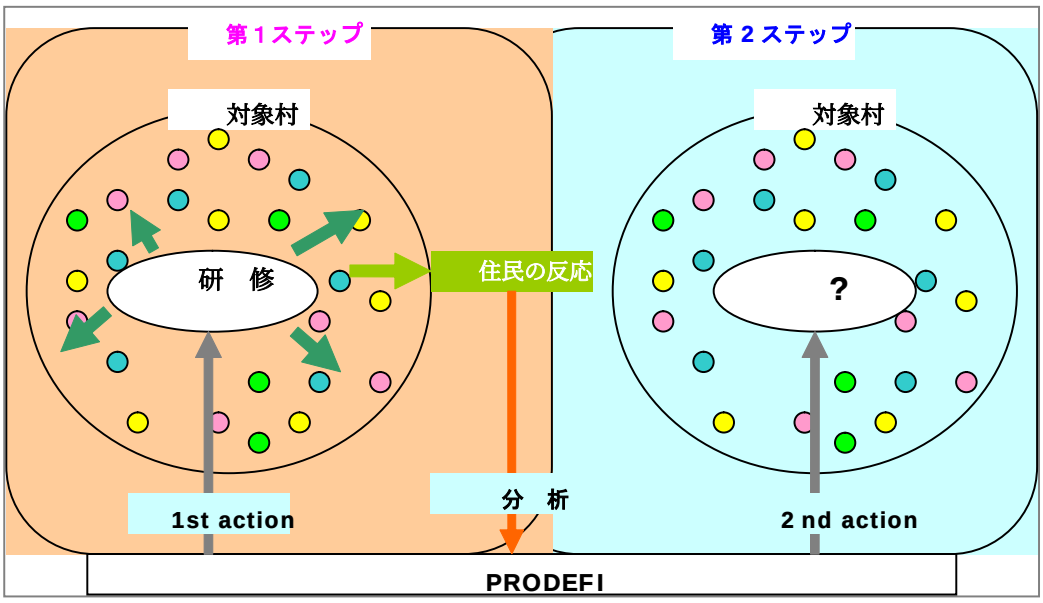


図 4-1 PRODEFI モデルの概念図　その２

４－０　PRODEFI モデルの適用の前に

各ステップの説明に入る前に、プロジェクト実施者が PRODEFI モデルを活用するに際し、必要な心構えを簡単に記述したいと思います。

PRODEFI モデルは、「投入により生じる効果を全て予測できない」という視点に立脚しています。そのため、プロジェクト実施者は、次の点に留意する必要があります。

1. 「最初の投入を抑え、投入の効果を見て、次の投入を決める」
2. 「プロジェクトで対応不可能な活動があることを承知し、他のリソースとの連携を考える」
3. 「実施者と現場の間での迅速な情報伝達･収集の仕組みを作る」

4-0-1　「最初の投入を抑え、投入の効果を見て、次の投入を決める」

PRODEFI モデルでは、「ローリスク研修」がインプットの開始です。プロジェクトの開始当初から大きなインプットを入れません。最初のインプットに対する住民のリアクションを見て、次に必要な措置（具体的活動）を考え、必要であればそれを実施します。プロジェクト実施期間中は、その繰り返しが続きます。何度、「インプット（＝活動）－リアクション」の繰り返しができるのかは、期間、予算、対象地域などのプロジェクト毎の制約条件で決まります。

4-0-2　「プロジェクトで対応不可能な活動があることを承知し、他のリソースとの連携を考える」

「インプット－リアクション」を繰り返すにあたり、プロジェクト実施者が理解せねばならない点は、プロジェクトには限界があるということです。プロジェクトとは、投入される資源や投入時期が予め決められ、その資源を効率的に使い、事前に決定され目標を達成するという行為ですので、「どのくらいの期間の支援が必要か」見通しの立てにくい活動や、「そのプロジェクトの目標やスキームになじまない」活動、「成果の見えにくい」活動には上手く対応できません。ですから、プロジェクトとして、「住民のリアクションに応える」といっても、困難な場合が往々にしてあるのです。少量の投入を長期にわたり行う必要がある場合は、期限を決めない持続的な対応が可能な政府機関や住民組織との連携、プロジェクトの目的と異なる活動に対処するためには、他の援助機関との連携、成果が出るかどうかわからない活動への対応には、柔軟な TOR を持つ各国のボランティアとの連携など、様々な選択肢を考慮に入れ、「住民のリアクション」に対して総合的な対応ができるような体制つくりが、プロジェクトを実施する側にも求められます。

4-0-3　「実施者と現場の間での迅速な情報伝達・収集の仕組みを作る」

「インプット－リアクション」の繰り返しを効率よく行うためには、現場でのリアクションを迅速に把握し、実施者に伝達するという「現場→プロジェクト実施者」の情報収集・伝達の仕組み、そして、現場のリアクションに対するプロジェクトの次のインプット（活動）を現場に周知徹底させる「実施者→現場」の情報伝達・普及の仕組みを作る必要があります。PRODEFI では、各対象地域で１名のアニメーター（基本的に対象地域の住民）を雇用し、彼らにオートバイと燃料費を支給し、機動性を高めています。アニメーターは実施者（ダカール）と現場をつなぐ重要な要素で、PRODEFI プロジェクトチームとアニメーターの間には緊密なコミュニケーションが常に持たれています。

PRODEFI モデルを活用するのが、その地域の NGO や住民組織である場合、実施者が現場の中に位置しますので、実施組織のスタッフがアニメーターの役割を果たすことになるでしょう。

４－１　第１ステップ：PRODEFI 研修実施

PRODEFI モデル第１ステップでは、PRODEFI 研修が活動の中心です。しかし、当然のことながら、PRODEFI モデルを活用するプロジェクトのタイプが異なれば、PRODEFI 研修のあり方も異なり、生じる効果も違ったものとなります。以下に、単一分野のプロジェクトの場合に実施される「単一セクター研修」と、複数の分野を対象とするプロジェクトで行われる「総合研修」の効果を比較します。

4-1-1　１つの分野に特化したプロジェクト：単一セクター研修

林業や農業など１つのセクターを対象としたプロジェクトでは、その分野のテーマを中心に研修が組まれることになります。例えば、林業分野のプロジェクトや森林局の活動では、生産サイドの「苗木生産」や「植林技術」の研修を中心に行い、保全の観点からは「家庭用改良カマドつくり」等の研修が組み合わされることでしょう。しかし、並行して「石鹸作り」や「染色」などの研修を行うことは、余り考えられません。このような単一セクターにインプットを集中するプロジェクトであっても、PRODEFI モデルを活用すれば、３－２で見たように、低予算で目に見える効果を上げることができます。ただし、この場合、住民側にプロジェクトの対象分野に対するニーズがあることが前提条件となります。例えば、林業プロジェクトを実施しても、対象住民の植林活動に対するニーズが、ある程度、高くなければ、PRODEFI モデルを適用しても、その技術の実践や普及は望めません。

開始当初の PRODEFI では、対象地域において、選別型の「苗生産技術」研修を実施していましたが、1 村あたりの参加者数が２～３人と少なく、研修後、各村での実践者も少なく（村毎の参加者が少ないので当然）、参加者から他の住民への情報・技術伝達も活発ではありませんでした。その結果、PRODEFI が主導する共同苗畑での作業以外で、苗生産を実践する者はなく、「自主的な苗生産活動」の普及も見られませんでした。

同じ地域で、PRODEFI モデルの研修を開始してからは、研修後に、参加者（平均で 1 村あたり 40 人以上の参加）の６割以上が個人で、ほぼ全員が集団で苗生産を実施していることがサンプル調査から明らかになりました（注釈１参照）。

自分の畑に作った「オレの苗畑」（井戸も掘った！）

家にあるものを使い、庭の片隅に作った「私の苗畑」

このように、PRODEFI モデル研修は単一セクタープロジェクトでも、対象住民にその分野の活動に対するニーズが存在すれば、大きな成果が得られますが、次に述べる総合プロジェクトで実施された場合には、より大きな効果が生じることが確認されています。

4-1-2 総合農村開発・地域開発型プロジェクト：総合研修

住民の側には、「単一セクター活動」という発想はありません。彼らの日常は、農業、牧畜、手工芸など生産活動や、生産条件を向上するための（あるいは、悪化させないための）自然資源管理活動、生産物を売買する流通部門の活動など、すべてが絡み合って成り立っています。住民は「よりよい暮らし」を求め、資金や労力、土地などの限りある資源を有効活用し、絡み合った多くの活動から、最大の利益を上げようと日々奮闘しています。最近では、プロジェクト実施者側も、より住民の視点に近づき、マルチ・セクターアプローチを採用することが多くなりました。このような複数の分野をカバーするプロジェクトで、PRODEFI モデルを活用した場合、単一セクタープロジェクトにおける活用と比べ、発現する効果にどのような違いが生じるのでしょうか。

総合農村開発などマルチセクタープロジェクトでは、実施される研修のテーマも多岐にわたります。この研修方式を、ここでは、「総合研修」と呼びましょう。これまで PRODEFI でも、１つの村で、「土壌保全」、「野菜栽培」、「家畜肥育」、「染色」、「プログラム・プラニング」、「小規模金融」など様々なテーマの研修を実施してきました。つまり、PRODEFI モデル型の総合研修を実施してきたわけです。この結果、「高い実践度、高い普及度」という単一セクター研修の効果に加え、住民の中に、以下のような認識・活動の変化が観察されました。

1. 「**色々なことができる**」：生産活動の多様化とリスク分散の可能性
2. 「**入口がたくさんある**」：住民の興味のひろがり
3. 「**どれも大切なこと**」：関係性の再認識
4. 「**何が大切なことかわかった**」：知識と技術の有用性の再認識
5. 「**みんなで、いろいろやってみよう！**」： 住民による「村おこし」を目指して

石鹸作り研修

家畜肥育研修

１）　「色々なことができる」：生産活動の多様化とリスク分散の可能性

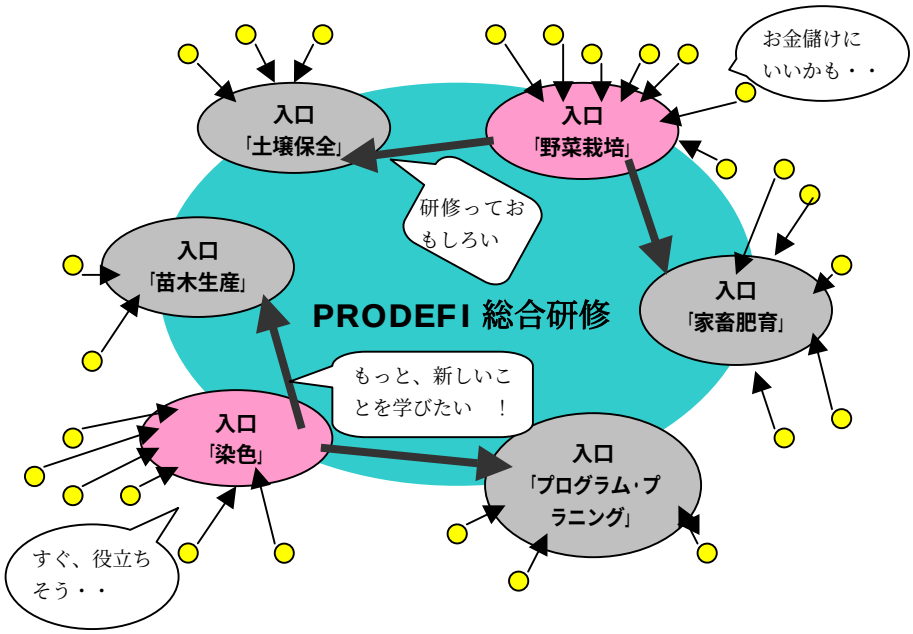
様々なテーマの PRODEFI 研修への参加を通して、落花生やミレットの栽培、牧畜などの主要生産活動に加え、多くの住民が、林業生産や染色、石鹸作りのなどの新しい活動に取り組み始めています。これらの活動の中には、野菜栽培や染色など現金収入の向上に直接、寄与するものもあり、住民の収入源の多様化にも貢献しています。前述のサンプル調査でも、多くの住民が、PRODEFI の支援を受け、「生産活動が大きく多様化した」と答えており、半数以上が「収入が大きく向上した」としています（添付資料 グラフ２参照）。

様々なテーマの研修への参加を通じて、色々な知識や技術を習得することにより、住民の選択肢が増え、その結果、活動と収入源もより多様化（リスク分散）してきました。

２）　「入口がたくさんある」：住民の興味のひろがり

PRODEFI の行ってきた研修は様々な分野をカバーしていますので、住民は、まず、自分の興味のある分野の研修に参加すればよく、そこが、住民の PRODEFI 研修への入り口です。研修に参加した住民の多くが、「研修は楽しい」、「研修は役に立つ」と話しており、研修の有用性や技術の重要性に関する認識を強めています。最初は、「お金が儲かるかもしれない」と考え、野菜栽培の研修に参加した住民が、その場で、新しい技術を習得する喜びや知識を体系的に整理する機会を得て、「研修はいい」と思い始めるのです。そして、「他の研修にも参加してみよう」という意欲が生じ、植林や土壌保全など「地道な活動」の研修にも積極的に参加するようになります。

「自分の入口」を見つけ、そこから PRODEFI の総合研修に入り、他のテーマの研修にも参加するようになるにつれて、住民たちの興味や活動は、どんどん広がっていくのです。



入口がたくさんある PRODEFI 総合研修　（1 度入ったら出られない！？）

３）　**「どれも大切なこと」**：関係性の再認識

住民は、年々、自分たちを取り巻く自然環境が劣化していることを、農作物の収量の減少などから、痛感しています。しかし、病む自然にどのように働きかければ、病気の進行をとめられるのか、健康にすることができるのか、有効な治療法を見つけられずにいました。他方、農業生産が減少したことで、食糧や現金の確保が難しくなり、住民の目は、直接現金収入につながる活動に向きがちです。

PRODEFI の総合研修では、長期的な取り組みが必要である自然資源管理に関するテーマと即現金収入につながるテーマが混在しています。色々な研修に参加するうちに、住民自身が、生産活動や自然環境についての知識を、互いに関連付けながら整理していくことになり、結局、「水も木も土も野菜や落花生も家畜も、全てがつながっており、個々の要素にではなく、全体に働きかける必要がある」との認識を深めます。

住民の中に、「野菜栽培などすぐに結果の出る活動」、「自然環境の改善のように長期的な取り組みが必要な活動」という視点が生まれ、生活の安定や向上のためには、両方の活動をバランスよく実施していかなければならないという考えが浸透しつつあります。

４）　**「何が大切なことかわかった」**：知識と技術の有用性の再認識

１つの村で、異なるテーマの研修を行うことにより、参加する住民の知識と技術が着実に増え、その活用や実践を通じて、彼らは、技術と知識の重要性を再認識していきます。PRODEFI 対象村でも、以前は、「まず、お金になるかならないか」が、研修へ参加する・しないの重要な判断基準の１つでしたが、最近では、「お金は使ったらなくなるけれど、知識や技術は残る」と言う住民が少なからず出てきました。そのとおり。PRODEFI が去れば、PRODEFI の資金もなくなりますが、PRODEFI 研修で学んだ技術は、常に住民と共に残り、彼らを助けます。「技術という目には見えないけれど、自分たちの選択肢や可能性を広げるもの」の大切さを、その実践を通じ、住民は実感しています。

５）　**「みんなで、いろいろやってみよう！」**：住民による「村おこし」を目指して

PRODEFI の総合研修に参加するうちに、住民の中に技術と活動の選択肢が広がり、様々な「可能性」が生まれてきました。多数を対象にする PRODEFI 研修ですので、「自分たちの可能性」を自覚する住民の数も多いのです。また、住民間のコミュニケーションも活発になり、研修後の実践による目に見える成果も出てきました。そして、住民個人のみならず、村が動き出しました。外部の支援者が使うような「開発の方向性」という明確なものではありませんが、多くの住民が、研修で得た様々な知識を活かしつつ「自分たちの村をよりよくするにはどうすればいいか」を考え始め、村全体で何かしてみようという機運が高まっています。

BOX 9 いろいろいいことあるね！ PRODEFI 研修

PRODEFI の活動が始まってから、女性と男性が一緒に仕事をする機会が増えた。

以前は、夫が研修に出席していないと、その妻は研修に出席することができなかったが、今は夫が出席していなくても、妻を研修に出席させてくれるようになった。

女性グループのメンバーは以前、地区ごとに集まることが多かったが、研修が始まってからは村全体の女性が集まって話をする機会が増えた。

PRODEFI 研修後の活動で、少しの現金収入が得られるようになった。これによって、女性の労働が軽減された。以前は、収穫の終わった落花生畑で、畑に残った落花生を探して、たいした収入にもならないのに、体力的に疲れる作業をしていたが、その作業もしなくて済むようになった。また、マキ集めも大変な作業の一つだったが、現金収入が得られるようになって、今は馬車に薪の運搬を頼めるようになった。

以上、マルチセクタープロジェクトで、PRODEFI 研修を実施した際に、生じる興味深い効果を述べました。ここで視点を変えますと、「植林や森林保全」を目的とするプロジェクトであっても、住民がプロジェクトに参加する入口（きっかけ）を増やすためには、また、住民の中にある植林や森林保全と他の活動の関連付けをより明確にする意味で、一見そのセクターと関連がないように見える活動をテーマにした研修を組み合わせることも、有効であるといえるのではないでしょうか。プロジェクトの最終目的である住民の「植林や森林保全」活動への自主的な参加の確率を高めるためには、遠回りに見えても総合的なアプローチをとることが、結局、近道かもしれません。

4-1-3 補完措置

PRODEFI では、研修で得た技術・情報を実践に活かすために、必要な最小限の外部資源を、研修時、あるいは、それと前後して、対象村に投入します。村にある施設や道具などは調査時に把握できますので、計画時に、研修以外に他にどのようなインプットが必要かを、まず、明確にします。そして、住民自身がそのインプットを賄うことが困難である場合に限り、「研修の補完」と位置づけ、対象村に提供します。具体的には、「野菜栽培」を実践するための井戸や、「染色」を実施するために必要な最低限の道具などが例として挙げられます。後者の場合、教材として村に持ち込み、研修時は、それを講師とともに参加者が活用し、終了後に村に供与するという形をとりました。繰り返しになりますが、これらの投入は、あくまでも研修の補完であり、PRODEFI モデルにおいては、メインの活動になることはありません。

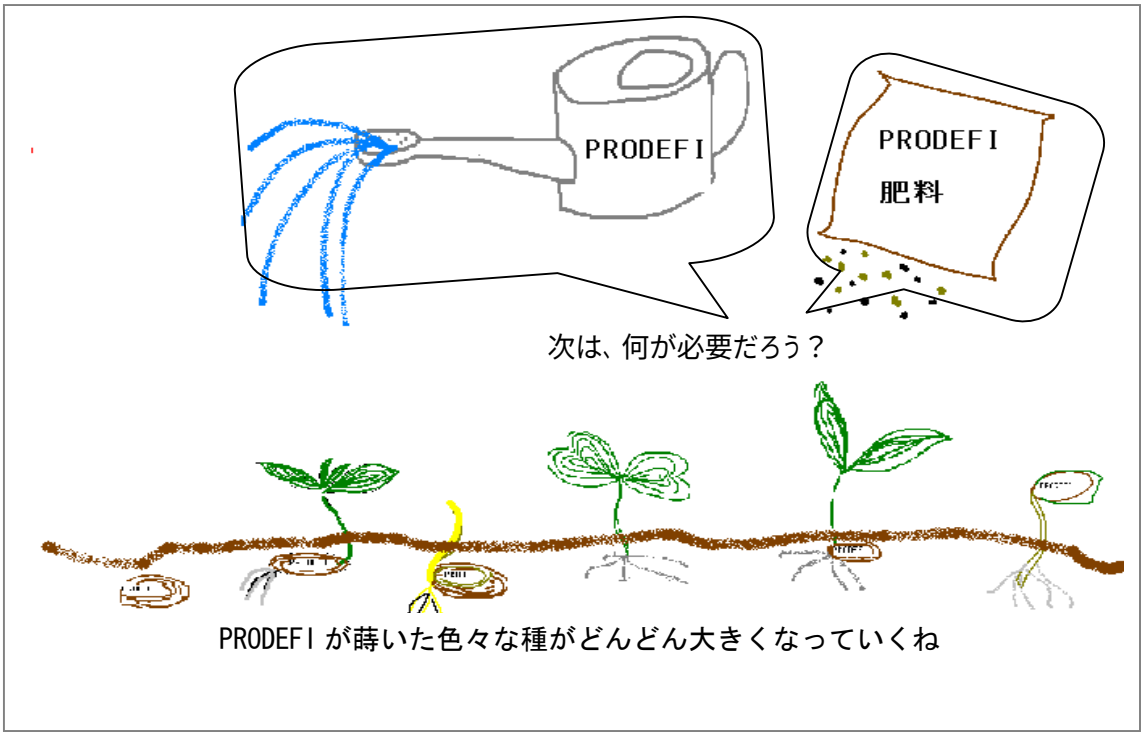
「染色」研修の様子

野菜栽培と井戸

４－２　第２ステップ：研修効果の持続と補強のための措置

「地域のニーズに応えた研修を、地域の資源を活用し、参加者を選別せずに、多数の住民を対象とし、現地で実施する」という PRODEFI 研修の原則に則り、PRODEFI では、対象地域で多くの研修をこれまでに実施してきました。畑に種をまくのと同様に、村にまかれた PRODEFI の種も発芽し、芽を伸ばしつつあります。PRODEFI では、現在、この芽を大切にしながら、それがよりよく育つようにするにはどうすればいいかを考えています。

これまでの記述は、PRODEFI の活動とその結果、つまり実例に基づいていますが、以下の内容は、今までの PRODEFI 研修に対する住民の反応を考慮し、PRODEFI モデルの第２ステップの活動として可能と思われるもの、つまり、可能性に基づくものです。



PRODEFI 研修後の住民の反応より考えられる、第２ステップの活動例

1. 技術的なフォローアップ
2. 組織運営の強化
3. 活動実施に必要な資本の調達
4. 小規模インフラストラクチャー整備

4-2-1 技術的なフォローアップ

研修で得た知識や技術を実践することにより、住民達が、新たな問題・課題にぶつかることは当然のことです。実践者が多ければ多いほど、問題や課題も増え、研修実施者が、それに適切に対応していかなければ、住民達は実践をやめてしまうかもしれません。同時に、実践を通じて、「この活動の延長として、次はこういうことを行いたい」というアイデアも住民の中に生まれます。

いずれにしても、実践が次の研修のニーズを生み出し、そのニーズに、できる限り応えるというのが、PRODEFI の原則です。これまでに、住民から寄せられた課題や希望の一端を紹介しますと、「個人植林の活着率が低い」、「小さな石積み工法では大水で流されてしまう」、「野菜の早期出荷を目指したい」、「野菜の保存法や加工法を学びたい」、「石鹸作りや染色のいろいろな方法を知りたい」などが挙げられています。これらの住民の反応に応えるために、第 2 ステップでも研修を中心とした技術的フォローアップが中心活動の１つと位置づけられます。

4-2-2 組織運営の強化

「みんなで、いろいろしてみよう！」の項に書きましたように、PRODEFI 対象村では、村の開発にむけて、住民の間に、何か新しいことに組織的に取り組んでいこうという動きが見られます。組織として行動する場合は、個人と異なり、情報伝達や調整などの成員をまとめる作業が必要になると同時に、資金や労力のように使用可能な資源も増えますので、その管理と効率的な活用が重要になってきます。「みんなでやろう」という機運が出てきている今、同じ目標に向けて皆をまとめていくリーダーを育成することや、住民が組織というものを学び、それを運営する機会を提供することは、非常に時機を得た活動であると考えられます。

4-2-3 活動実施に必要な資本の調達

PRODEFI の対象村では、個人レベルでもグループの中にも、「次はこのようなことをしたい」というアイデアが多く生まれています。アイデアを実現するために必要なのは、「見通し」と「資源」です。「見通し」については、PRODEFI 研修ですでに「プログラム・プラニング」研修を実施しており、今後も、住民への情報・知識の伝達と、適宜、助言を与えることで対応可能です。他方、「資源」に関しては、情報・知識以外に、資本の調達を考えなければなりません。資本を、頼母子講の形式や資金分担(Cotisation)の形で、村やグループ内部で調達するのか、共済基金（Crédit mutuel）や NGO・ドナーの持つ融資システムなど外部の金融機関から調達するのか、可能性は様々です。いろいろな可能性を検討し、資本を調達し、出資者に返済・分配し、最終的には次の資金を調達するという流れを、住民自身が繰り返し行えるような支援が、今、求められています。

4-2-4 小規模インフラストラクチャー整備

原則は 4-1-3 の「補完措置」と同じです。この選択肢が、第２ステップの主要な活動になることはありませんが、状況に応じ、必要と判断された場合は、小規模のインフラの投入を行います。

BOX 10 フィムラ地区に誕生した村の工房 (BOX 4の続き)

「ビーズ細工」、「染色」、「野菜加工」の研修の後、フィムラ地区の各村では、研修参加者がグループを作っている。 そして、研修中に作った製品の販売から得られた資金を次回の原材料購入費に充て、村に残された道具を活用しながら、村で製造を継続していく体制が整いつつある。これらのグループは、村の共済基金等に口座を設けて、売り上げ(＝回転資金)を預け、資金管理にも抜かりがない。ジロール村では、研修参加者やそれ以外の住民で製造に参加したい者が、少額ずつではあるもののお金を出し合い、回転資金の増資を図っている。観光業が盛んな同地区の地域特性を活かし、観光客をターゲットにした製造・販売戦略を立てるグループもあり、村に誕生した小さな工房の今後の展開に注目したい。

４－３　PRODEFI モデルの有効性

PRODEFI モデルの特徴を思い出してみましょう。

- まず、研修という形で、対象地域へのインプットを開始する
- 地域のニーズに応えた研修を地域の資源を活用して、参加者を選別せずに多数を対象として村で実施する
- インプット(＝研修)に対する住民のリアクションを見て、次のインプットを検討する

現在、PRODEFI では、研修に対する住民の反応を把握しながら、次の活動の可能性を探っている段階です。ですから、この時点で、モデル全体の有効性を論じるのは時期尚早と言えます。しかしながら、モデルの特徴から、その有効性を演繹的に導き出すことは可能です。ここでは、推論に基づきつつも、限られた PRODEFI の経験に照らし合わせても妥当と思われるモデルの有効性に関し、論じたいと思います。

4-3-1 開発プロセスを研修で開始すること

研修は情報交換の１つの手段です。それも、テーマが明確であり、結果として住民の活動に帰着する可能性の大きな情報交換のあり方です。住民が漠然と抱いていた「こういうことをしたい」、「この問題を解決したい」という思い（＝要望やニーズ）が、知識や経験の交換の場である研修を通し、「こうすればいい」という具体的な行動指針に変容していくからです。PRODEFI モデルでは、研修を、住民主体の活動実施への「呼び水」、あるいは、眠っている住民のダイナミズムを呼び起こす「刺激」と考え、モデルの最初の活動に位置づけています。もちろん、研修より得た知識や技術を活用する・しないは、個々の住民の自由ですが、研修テーマが住民の漠然としたニーズに応えるものであれば、実践という形でその反応が返ってくるはずです。PRODEFI が実施した種々の研修に対し、住民は実に数多くの様々な反応を示しており、この事実が「刺激」や「呼び水」としての研修の有効性、ひいては研修を開始点とするモデルの有効性を物語っているといえます。

また、双方向の情報交換の場である研修は、対象住民とプロジェクトの間の信頼関係を構築する手段としても有効です。プロジェクトの最初の活動を研修とすることで、住民は知識や技術だけではなく、当該プロジェクトの姿勢を学ぶでしょうし、プロジェクト側は住民の実情や彼らのニーズをより的確に把握することができるのです。

さらに、研修実施には、新しい特別なスキルを必要としませんし、PRODEFI モデル型の研修を実施すればコストも低く抑えることができます。そして、モデルのユーザーが、住民のニーズを尊重しつつも、プロジェクトの目標に基づき、研修のテーマを選定することで、その後の住民の活動の幅を、ある程度調整することも可能です。つまり、ユーザーは、自分たちの経験や資源、目的を考慮し、研修を実施していけばいいのです。

研修を開発プロセスの起点とすることにより、低いコストで、住民主体の活動を始動、促進するきっかけを作り出すことが可能です。

4-3-2 「非選別型研修」を開発プロセスへの入口とすること

PRODEFI モデルの開始点である研修が、「非選別型」であるということも、モデルの有効性を説明する上で重要な要素です。住民誰もが等しく研修参加の機会をもつということは、研修を起点とする開発プロセスへも誰もが参加できるということです。

どの村にも存在する「資源や選択肢の少ない貧困層の住民」、「通常、住民組織をパートナーとする外部者の支援を受けにくい組織に参加しない住民」、「学業や出稼ぎ等で季節移動をする若年層」などのカテゴリーの人々も、「非選別型」の PRODEFI 研修でしたら、参加することができます（実際に、PRODEFI 研修の参加者にはこれらのカテゴリーの人々が含まれています）。様々なカテゴリーの住民が研修に参加し、みなが同程度の知識や技術を身につけ、それを実践していくことにより、「活動－反応」の繰り返しからなる開発のプロセスに巻き込まれていくのです（６－４の Box11 参照）。

このように、「誰もが自分の意思で参加できる」PRODEFI 研修をモデルの起点とすることで、個人や組織のレベルで、村全体で、住民の開発プロセスへの自主的な参加のすそのを広げることになるのです。

4-3-3 開発プロセスが「活動－反応」の繰り返しで構成されていること

PRODEFI モデルでは、最初の活動である研修に対する住民の反応を見て、次の活動を検討します。研修テーマが住民のニーズに合致している場合、研修後、住民は研修で習得した技術の実践、つまり、「野菜栽培」、「苗生産」、「染色」など具体的な活動に移ります。これが住民の研修に対する反応であり、モデルのユーザーはこの反応を観察しつつ、次に打つ手を考えるわけです。ひとたび住民が活動を開始すれば、新たな問題や要望が生じます。この時点で、住民は自分たちで開始した活動を維持するためには、また、発展させるためには、何が必要かといことを真剣に考えます。

５－５で実例を述べますが、PRODEFI モデルで提案していることは、研修が刺激となり住民が活動を始めて、本当に必要なものがわかった時点で、次の投入を行うということです。このタイミングで次期投入を行えば、プロジェクトにとっては無駄な投入が省けますし、住民にとってもその投入の重要さや必要性が十分に理解できます。住民が何か活動を始める前に、外部者がすべてお膳立てを整えて、「必要と想像されるもの」を提供するのでは、住民にはその価値がわからず、外部者にとってはリスクが大きくなります。PRODEFI モデルの投入タイミングですと、このリスクが最小に抑えられることがわかっていただけると思います。

５．PRODEFI モデルの実践の流れ

ここでは、すでに PRODEFI で実施し、経験の蓄積もある、研修活動を中心とした PRODEFI モデルの第１ステップについて、PRODEFI の実例に基づき、その具体的な実施手順と工夫、留意点を簡単にまとめます。

５－０　プロジェクト対象住民への説明

「プロジェクト」という言葉を聞いたとき、住民は何を思い浮かべるのでしょうか？ PRODEFI の経験ですと、「外から来た人が、どんなプレゼントをくれるのだろう」と、まず、彼らは考えるのだと思います。PRODEFI の最初のプレゼントは「研修」であり、「目に見えるなにか」ではありません。それは、住民の想像とは違っているところがあるようです。そこで、PRODEFI モデルを活用するプロジェクトで働くスタッフは、その実施期間を通じ（特に最初の段階では）、住民に「このプロジェクトは研修しかしない」ということを言い続ける必要があります。１年も経ちますと、住民も、「このプロジェクトは研修しかしない」ことを理解するはずですし、これまでに述べた研修の効果を住民自身が感じるようになり、プロジェクトに対する「物的な依存心」も薄れてくるようです。

５－１　ニーズ分析

実施者にとり、PRODEFI モデルの研修の大きな魅力のひとつは、「**ローリスク**」、つまり、「低インプットで研修実施にかかる時間が短い」ということです。PRODEFI 研修では、ニーズ・要望把握のための調査にも、多くの時間や資金を投入することはありません。

PRODEFI 研修は、基本的に村単位で実施されますので、調査の実施単位も村となり、調査のアウトプットは「村毎に実施される当面の研修テーマ」となります。調査の項目としては、「村内の自然、人的、物的資源の確認と問題」、「村の基本的な経済社会情報」、「他の支援組織の活動内容」、「住民の受講研修の履歴」、「住民の研修に対する要望」くらいでしょうか。詳細なアンケート調査をする必要はなく、簡易型の調査で十分です。なぜなら、研修を繰り返し実施していくうちに、村や住民の詳細情報は把握できますし、PRODEFI モデルの特徴である「インプットに対するリアクション」が、次の行動の指針を与えてくれるからです。

PRODEFI モデルを自然資源管理分野のプロジェクトに活用する場合は、村毎の情報に加え、森林や水、牧草地などの対象資源ごとにその利用者を特定する必要があります。１つの自然資源を、複数村が利用する、または、特定の社会集団（牧畜を営むプル族や低地で稲作

を行う女性など）のみが利用することが、往々にしてあるからです。この場合も、「研修参加者を選別するために」資源の利用者を特定するのではなく、「資源の利用者＝管理者」がどのように分布しているか、どの村を対象に研修を実施すればよいのかを把握するために利用者を特定するのだということを忘れてはいけません。

村内の自然資源の確認

プル族代表による牧畜資源の確認

５－２　研修計画策定

さて、各対象村での当面の研修テーマが決定しました。次は、研修計画、つまり、「いつ（何月に）、どこで（どの村で）、何を（どのテーマの研修を）」を行うかを決めます。PRODEFI では、「年間研修計画」という形に、この計画をまとめますが、その期間は、３ヶ月ごと、半年ごとでもかまいません。重要なことは、「研修計画は、研修実施にともない日々見直しが可能な」柔軟なものであると、実施者が認識することです。

例えば、PRODEFI では、これまでに、住民の要望を反映する形で以下のように研修計画を変更しました。

- **「１つの研修が他の研修ニーズを生む」**:「野菜栽培」研修の実践後、住民より新たに「野菜加工技術」研修実施が要請されたため、研修計画に「野菜加工技術研修」を追加した
- **「住民間情報ネットワークを通じ研修テーマが普及する」**: ある村で実施された「染色」や「小規模金融」研修のうわさを聞いた別の村の住民から、「同じ研修を実施してほしい」と要望が出たため、年間研修計画になかった村でも、同研修を実施した
- **「実施者の視点より研修ニーズを洗い出す」**: プロジェクト側が、村や周辺状況を知るにつれ、住民の潜在的なニーズを発掘することもあり、PRODEFI スタッフが、「地域市場では果物の需要が大きい」という情報と、「住民は、毎年果樹栽培を試行しているが、接木に関する技術・知識が欠け、成功していない」という情報を組み合わせ、住民の中に眠っている「果樹栽培」研修というニーズを掘り起こした

PRODEFI では、大体、「１つの村で１ヶ月に１度」研修を計画しています。定期的に研修を実施することで、研修が「村の行事化」し、「もうそろそろ PRODEFI 研修だな」と住民の中に研修リズムが生まれることも確認されました。

５－３　研修準備

5-3-1 地域の講師探し

大体の計画が決まった時点で、研修テーマ毎に「地域の講師」探しを開始します。求められる人材は、「研修テーマの技術を有する者で、対象村内、あるいは、なるべく近くに住む人」です。候補者探しには、住民や農村普及センター（CERP）のスタッフ等が提供してくれる情報を最大限活用します。これまで、PRODEFI の研修で講師を務めた人材としては、地域の職人（石鹸作りや染色）、CERP スタッフ（苗木生産、プログラム・プラニングなど）や他の政府地方機関の技術者（植林、野菜栽培など）、他プロジェクトのスタッフ（養鶏、家畜肥育）、ＪＯＣＶ隊員（ビーズ細工、野菜栽培）等が挙げられます。地域の講師を採用しているという情報を発信したところ、「×〇の講師ならできる」と住民自らが売り込みに来る例もありました。その地域で種々の技術をもつ地元講師をみつけることは、そんなに難しいことではありません。

5-3-2 講師による研修準備

講師は、基本的に、地域の住人でもあり、対象住民の問題や知識・技術のレベルを把握していますので、研修の詳細内容は講師に決めてもらいます。講師に留意してもらう点は、「実習に十分に時間を割く」、「村や地域にあるものを教材として最大限活用し、外部から持ち込むものを最小限にする」ことぐらいでしょうか。この最小限の外部資源の調達も、素材や入手場所を良く知る講師の仕事です。外部資源も、住民の入手可能性を重視し、現場に近いところで調達してもらいます。例えば、養鶏研修には、ダカールの方がいいひよこが安く買えるとしても、現地の市場で買えるひよこを外部教材として用います。

5-3-3 村での住民との研修準備

研修実施の詳細日時は対象村住民とともに決定します。同時に、村での研修場所や植林などの実習場所も村で決めてもらいます。テーマによっては、住民サイドで事前の教材準備が必要なものがありますが（例えば、養鶏研修の鶏舎作り）、研修テーマは住民の求めるものですので、多少の不都合はあっても、住民自身がちゃんと準備してくれます。
PRODEFI では、前述のアニメータ（時には、講師も）が中心となり、対象村での会場の確保や設営などの研修準備を進めます。住民と共に研修準備を行うことで、住民の研修に対する意欲も高まります。

5-3-4 実施者側の調整

研修を実施する側としては、村からの情報により、だいたいの研修参加希望者数を把握し、その人数が 1 回の研修でカバーできないほど多い場合は、同じテーマの研修を同じ村で 2 回、3 回と実施する準備をします。PRODEFI の経験では、同じ村で研修を数回繰り返すうちに、「この村での研修参加者はだいたいこれくらいであろう」と、事前に予想がつくようになります。

研修講師との打ち合わせ

住民が準備した鶏舎

５－４　研修実施

5-4-1 研修実施当日

当日は、住民が集まってきたら研修を始めますが、葬式などの予測不可能な事態があり、住民が来ない場合もあります。講師が地域の住人である PRODEFI 研修では、実施を延期することも可能で、このような緊急事態にも柔軟に対応できます（ダカールからの講師では、こうは行きません！）。

さて、住民が集まり、研修が始まりました。正確な参加者の数は、当日にならないとわかりませんし、例えば、3 日間の研修では、同じ参加者が毎日来るとも限りません。

研修の流れや指導法は、基本的に、講師に決めてもらいます。これまでの PRODEFI の研修では、研修後、研修で習得した技術を活用し、住民が自主的な活動を積極的に行うよう、参加者を講師が励ます例がありました。また、研修中に参加者が作った成果品（石鹸や染色布）を販売し、その資金を次回の原材料費に充てることを勧める講師もいました。この提案を受け、研修参加者が１つの委員会を作り、研修成果物の販売金の共同管理を始めた村もあります。また、村で行われる研修ですので、研修中の実習も、当然村で行われ、研修後も、同じ場所で、住民が研修で習得した技術の実践を、スムーズに継続して行えます。

屋内の研修風景

「青空研修」の風景

5-4-2 研修の評価・フォローアップ

研修後は、研修内容そのものではなく、その効果の評価に重点をおきます。つまり、研修で紹介した技術や知識を参加者やその他の住民が活用しているかどうか、どのように活用しているのかを、現場で確認します。住民がその技術を活用していても、さらに技術的な支援が必要と判断された時は、村で研修講師による定期的なフォローアップが、プロジェクトのインプットとして実施されます。例えば、これまでの PRODEFI の例ですと、野菜栽培に関しては、栽培期間中、講師が定期的に村を訪れ、異なる栽培段階で適切な指導を与えました。逆に、参加者の方から講師に会いに出かけ、アドバイスを求めることもありました。このように、研修終了後のフォローアップが容易に出来るのも、地域の人材を活用しているからこそです。

野菜研修の後に行われた巡回指導の様子

５－５　新たに生じたニーズの把握と次期投入の決定

PRODEFI モデルの全体像は、「研修という形で住民へのインプットを開始し、住民の反応を見て、次の活動を決定し実施する」というものでした。PRODEFI では、現在、研修実施による住民の反応や習得技術の実践を通じて生まれた住民の反応を受け止め、次の活動計画を立案する第２ステップに移行しつつあります。すでに、一部、住民の反応に対し、PRODEFI が活動で応えているものもあります。

具体例を挙げますと、「羊・牛」のみが教材であった家畜肥育研修の後に、「鶏に関しても知りたい」という要望が住民より出され、養鶏研修を実施しました。また、ある村では、野菜栽培を実践中に、水不足が深刻化したため、井戸の掘り下げを支援しています。他の村でも、1 シーズンの野菜栽培実践後に、より効率的な水やり作業を目的とした貯水槽の設置への支援が要請されました。いずれの場合も、「PRODEFI は研修しかしない」ことが住民にも定着してきたので、「村が砂利やセメント、労働力等を提供するので、PRODEFI は〇〇を支援してほしい」と、自分たちの貢献分を明らかにした上で、プロジェクトに支援を要請するようになりました。

このように、PRODEFI モデルでは、研修という形で住民に活動の開始や拡大の機会を提供し、住民が動き始めて、本当に必要なものがわかった時点で、住民の要望に基づき、次の投入を行います。4-3-3 で述べたように、このタイミングで次期投入を行えば、プロジェクトにとっても住民にとっても無駄な投入が省けます。

「養鶏」研修の一コマ

住民が PRODEFI の支援を受け作った貯水槽

６．PRODEFI モデルの活用にあたって：効果の発現を左右する要因

PRODEFI では、これまでに、PRODEFI モデル型の研修を 4 地区の 18 か村にて実施してきました。対象村の社会的・経済的な状況は様々であり、研修の効果の発現の仕方も異なるものでした。以下に、PRODEFI の経験より、効果の大小や発現の速度を左右する要因と、各要因に対し、十分な効果を得るために必要と思われる工夫を簡単にまとめます。

1. **人口規模**：人口の多い村では？
2. **住民の機会費用**：住民が忙しい村では？
3. **組織化の難易度**：既存の組織が不活発、住民の組織化が難しい場合は？
4. **他の支援団体の存在**：他の支援組織の活動がある地域では？

６－１　人口規模

PRODEFI 対象村の人口規模は、最小が約 200 人弱で、最大は 2500 人を超えています。小さな村では、同じテーマの研修を１、２回行えば、村の住民（活動人口）の多くがその研修に参加することになり、３－２で述べた効果が確認されるでしょう。しかし、大きな村では、１回や２回の研修を実施しただけでは、技術の習得や「研修に参加できたうれしさ」から生まれるやる気など参加者個人レベルでの変化はあっても、住民に占める参加者の割合が低いため（参加者密度が低い）、「参加者間」や「参加者と参加しなかった住民の間」の相互作用に起因する効果は起こりにくくなります（相互作用による効果としては、住民間での技術伝達や競争意識の芽生え、連帯感の強まりなど）。もちろん、この場合でも、PRPDEFI 研修の原則に戻って、希望者がある限り同じ研修を同じ村で何度でも繰り返し行い、村の参加者密度を上げていくことで対応可能です。研修実施に際し、大きな村では、「○▲の研修がいつどこである」といった情報を全住民に伝えるのも大変ですので、住居区単位で研修を行うなどの工夫が必要かもしれません。

６－２　住民の機会費用

セネガル農村の主要産業は、天水農業（ミレット、落花生など）、牧畜に加え、多くの女性が従事する小商売（バナバナ）です。PRODEFI も、住民の大半が忙しくする農繁期を避け、農閑期を中心に研修を実施しています。

しかし、フィムラ地区のように、乾季も観光業や漁業などの収入源がある村では、概して住民の機会費用が高く、活動の選択肢もすでに多くあるのですから、これらの比較的恵まれた層の住民のための「多数を対象にした研修」を実施するは必要ありません。このような状況の村で必要な戦略は、「格差の是正を目指す研修」です。機会費用の低い村の貧困層にターゲットを絞り、彼らのニーズに沿った PRODEFI 型の総合研修を実施しすることに

より、貧困層の生産活動の多様化やリスクの分散を支援します。この場合も、研修参加者を選別することはしませんが、あくまでも研修自体を、貧困層を対象にして組み立てるということです。

貧困層の総合的な能力アップに貢献するPRODEFIモデルは、「貧困削減」の有効な手段となるのではないでしょうか。

６－３　組織化の難易度

研修で紹介した技術・知識の実践や普及には、組織が大きな役割を果たします。参加者個人では実践が困難な活動もグループでなら可能な場合があり、また、個人レベルの技術伝達よりも、グループ内での技術伝達のほうがはるかに効率的であるからです。従って、PRODEFI研修の効果の大小や発現の速度も、対象村や地区の住民組織の状態に左右されます。既存の組織の活動が活発であれば、技術の実践や普及も活発に行われますし、既存組織がなくとも、PRODEFI研修を契機に住民グループが生まれる下地が村にあればいいのです。

村によっては、非常に「個人主義」の強い住民が多いところがあり、組織化も難しく、組織としての活動も不活発です。「個人主義」の原因としては、個人の活動が多岐にわたっているため他人とのスケジュール調整が必要な組織活動が困難である場合、個人が十分な資源を持ち自分の生産活動に必要な投資を自力で賄える場合などが考えられます。このような「個人主義」的傾向が強い村でも、例えば、研修での成果品の販売を通じ参加者の組織化の下地を整える、研修後のフォローアップとして参加者の協働を支援するなどの工夫をすれば、参加者のグループ活動が促進され、より大きな研修効果がえられるはずです。

６－４　他の支援団体の存在

セネガルの農村部では、ドナーやNGOなどの支援組織が、様々な活動（プロジェクト）を展開しています。複数の支援組織が活動する村では、実際問題として、「研修中心」という少々地味なPRODEFIモデルを活用するプロジェクトに、住民の関心を集めるのは難しいことです。このような状況では、競合するのではなく、BOX11で述べるように、他のプロジェクトを補完するという立場を貫くことが賢明です。PRODEFIモデルの実施者は、他の支援組織の存在することを、モデルの有効性を他者に示す好機としてとらえるといいでしょう。つまり、他者の目の前でモデルの効果を見せ、そのプロジェクトにも同モデルを活用してもらうように働きかければいいのです。

他のプロジェクトを補完することで、現場で援助協調を行うことになり、住民に対しても総合的かつ効率的支援が可能となります。そして、何よりも、他者の目の前で、PRODEFIモデルの有効性を示すことができます。このように、他の多くのプロジェクトと共存する現場では、PRODEFIモデルの存在そのものが、援助する側に（他の多くの支援組織に）、自分たちの「物をあげればいい」という援助体質を改めて考える機会を提供することにもつながるのです。

BOX 11 異なる目的を持った研修活動との補完の可能性の検討

同じ対象地域で、PRODEFI モデルを活用するプロジェクトが、異なるアプローチをとるプロジェクト A（研修活動あり）と、かち合いました。さて、どうすれば、互いの利点を活かしあい、相乗効果をえることができるでしょうか？

プロジェクト A

プロジェクト A では、村の起業家育成の目的で、10 日間の野菜加工研修を、プロジェクト対象地域内の数か村から、有料で 10～15 人の参加者を集め（希望者を複数の基準に沿い選別し、選ばれた参加者より 1500CFA を徴収）、加工設備の整った研修施設で実施した。講師はダカールを拠点とするＮＧＯスタッフやコンサルタントなどであり、1 回の研修費用は、数百万ＣＦＡに達した（参加者に支払われる食費、滞在費、交通費は含まず）。研修終了後、参加者の中には、共済基金などの融資を受け、必要な加工施設を整え、研修で習得した技術・知識を活用し野菜加工を行っている者もいるが、資金や「やる気」の不足から、何も行動を起こさない者もいた。

PRODEFI モデルを活用するプロジェクト

3 日間の野菜加工研修を3つの対象村で実施した。講師を県の農村普及局の職員に依頼し、3 村での全参加者数は 90 人、原材料・加工道具込みの研修総費用は、3 村で約 70 万 CFA であった。3村とも、研修後、成果品の販売と村に残された加工道具の管理のために、参加者のグループが組織され、販売資金を元手に加工を継続すると同時に、個人で加工をする参加者も現れた。

プロジェクト A の研修は、少数の選別された参加者に大きなインプットを投じ、村の起業家を育成することを目的としています。よって、多数を対象とし、村や組織、個人の基礎体力作りを目指す PRODEFI 研修とは、その趣旨が異なることを理解しなければなりません。どちらのタイプの研修にも利点と限界があることを認識すれば、両者を組み合わせることにより、より総合的な効果を得ることができるのではないでしょうか。

参加者を選別しない「PRODEFI 研修」には、村の貧困層や若年層、どの組織にも参加しない住民でも参加できますので、例えば、「野菜加工」の研修の後には、これらの周辺的住民を含む多種多様な研修参加者がグループを作り、村に供与された道具と研修中に製造した加工品の販売から得た資金を活用し、グループで加工作業を継続していきます。加工品の市場での需要が確認され、グループの組織力も向上し、さらに高度な技術や設備投資(加工器具や機材)が必要、かつ可能となった場合に、もし、プロジェクト A の例のような「起業家育成型」の研修にグループ（の代表者）が参加できれば、村の製造グループが「村の小企業」に変容し、大きく飛躍する可能性もあります。

誰にでも等しくアクセスが保障されている PRODEFI 研修を第 1 段階として実施することにより、その後に実施される活動（「起業家育成研修」や4－2で述べた他の活動など）にも、より広い層の住民の参加が望めるのです。

このように、対象村の状況に応じ、PRODEFI モデル実施者が、「受益者のターゲッティングとそのターゲットに合せた研修の組み立て」や「他の支援組織との補完」など柔軟に対応することで、モデルの適用の可能性は広がり、すでに述べた直接効果のみならず、「格差是正への貢献」「援助協調」など波及効果の発現も期待されます。

さて、これまで、ほぼ 40 ページにわたり、RODEFI モデルの説明を行ってきました。皆さんの頭の中には、何が残ったでしょうか？

PRODEFI モデルの根幹をなす考えは非常に単純であり、「とにかく、なにか活動をおこなってみよう。そして、何が起こるか見てみよう」というものです。住民に対し何か働きかけをした時に、個人、組織、村のレベルで、住民がどのような反応を示すのかはわかりません。ですので、PRODEFI モデルでは、最初に全部決めてしまわずに、住民の反応を確かめてから、次の活動を考えようと提案しているのです。

モデルの提示する開発プロセスへ住民を導入するのが、誰でも参加できる「PRODEFI 研修」です。彼らは、この大きな入口から「自分たちによる自分たちのための開発」のプロセスへと入っていきます。PRODEFI 対象地区の住民たちも、「PRODEFI 研修」の入口を通り、開発プロセスへ入ってきました。今後、彼らに、どのようなことが待ちうけているのでしょうか。

別の機会に、PRODEFI の「その後」について、また、皆さんにお話できればと思います。

研修受講証の授与「あなたを PRODEFI モデルユーザー候補と認めます。」

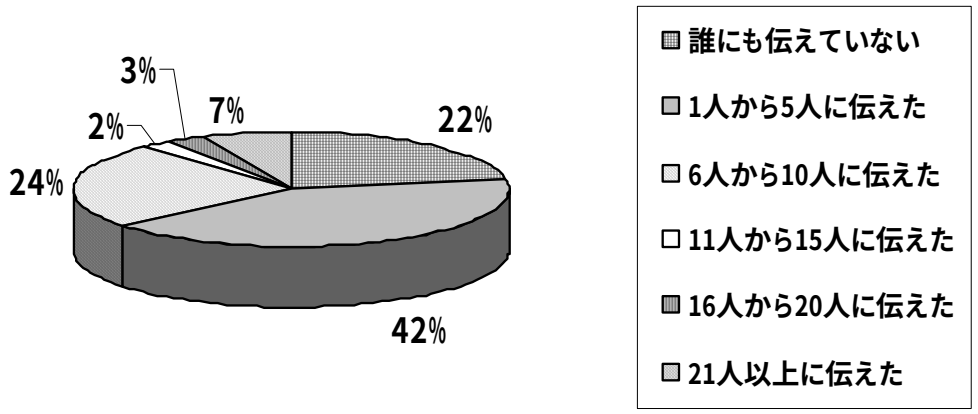
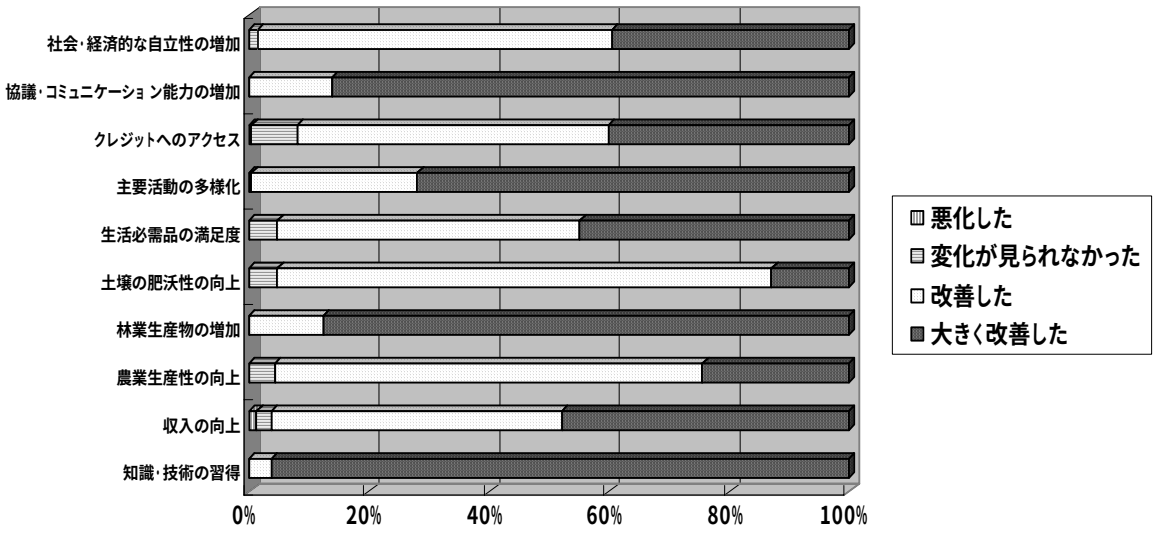
添付資料

以下の表、並びに、グラフは、2004 年4～5 月に PRODEFI 松谷短期専門家により、2つの対象地区（マンビ、フィルギ）の 7 か村で、PRODEFI 研修参加者の中から 30 サンプル／村を選び（計 210 サンプル）、行われた質問紙調査の結果を集計し、視覚化したものである。

表1　参加者による研修技術の実践率

研修テーマ	調査対象参加者中の実践者の割合　（%）	
実施形態	**個人で実践**	**グループで実践**
苗木生産	62.7 %	98.5 %
植林	85.0 %	97.9 %
土壌保全	34.0 %	97.9 %
野菜栽培	37.6 %	97.9 %
染色	17.9 %	96.4 %
石鹸づくり	28.9 %	93.2 %

グラフ　1　研修で習得した技術を他の人に伝達した参加者の割合



グラフ2　PRODEFI 研修が生み出した種々の効果